

2017年8月6日 礼拝メッセージ

聖書：第一列王記3章1～15節

説教：あなたに何を与えようか

はじめに

ダビデは、名もない農家の出でしたが、苦勞を重ねながらイスラエルの王となりました。言わばたたき上げです。いっぽうダビデの息子ソロモンはどうでしょう。良家の子息として大切に育てられ、戦場で戦った経験はありません。人を治めることすらなかったでしょう。現場を知りません。それがある日突然のように父の跡を継いでイスラエルの王になります。ダビデは、父親として経験のないソロモンを見て心配し、次のような遺言を残します。「私は世のすべての人の行く道を行こうとしている。強く、男らしくありなさい。あなたの神、主の戒めを守り、モーセの律法に書かれているとおりに、主のおきてと、命令と、定めと、さとしを守って主の道を歩まなければならない。あなたが何をしても、どこへ行っても、栄えるためである。」(2章2, 3節)

ソロモンは父ダビデが語ったこの遺言を心に刻みながら歩み出します。最初はどうなるかと心配しましたが、2章46節には「こうして、王国はソロモンによって確立した」と書かれていて、非常に順調なスタートを切ります。しかしすべてが順調だったわけではありません。ソロモン自身の中に問題が隠されています。それはなんであったのか。今日の箇所では二つのことが指摘されています。

1 モーセの律法

1) 異邦人との結婚(申命記7章3節)

まず一つ目。1節に、ソロモンがエジプト

の王パロの娘を妻に迎えたとあります。日本でも戦国時代や江戸時代、隣の藩の大名から嫁をもらったり、あるいは娘をとつがせることがありました。お互いに不必要な戦争を避けるために、結婚という形をとって人質の交換をするのが目的だったと言われます。ソロモンもこれと同じようにエジプトとの関係を良好に保つ必要を感じてこのような結婚をしたと思われまます。

これは律法にかなっていたのでしょうか。申命記7章3, 4節にこうあります。「また、彼ら(異邦の民)と互いに縁を結んではならない。(中略)彼はあなたの息子を私から引き離すであらう。」異邦人の女性と結婚するならば、必ず彼らはほかの神々を持ち込み、イスラエルの神から離れるようになると神は警告しています。ソロモンはこの戒めを破っています。すぐに問題にはなりません。しかししばらくするうちに、ソロモンがめとった妻たちはほかの神々をイスラエルに持ち込み、イスラエルが北と南に分裂していく火種となったことが後で明らかになっていきます。これがソロモンの弱さの一つ目です。

2) 高き所(申命記12章13節)

ソロモンの二つ目の弱さのことは3節にあります。「ソロモンは主を愛し、父ダビデのおきてに歩んでいたが、ただし、彼は高き所でいけにえをささげ、香をたいていた。」

高き所とはその名のとおり高い所で、丘の上であったり山の上ようなところを指します。そこで人々は神に対していけにえをささ

げていた、つまり礼拝をしていたということです。私が生まれ育った田舎では、神社がいくつもありましたがそのほとんどが必ず小高い山の上にあつて、中には1000年前に建てられて文化財の指定になっているものもありました。イスラエルと日本はまったく違う文化に思えますが、よく見ると似ている所が沢山あります。

この高さ所について、やはりモーセは申命記12章2節でこう警告していました。「あなたがたが所有する異邦の民が、その神々に仕えた場所は、高い山の上であっても、丘の上であっても、また青々と茂ったどの木の下であっても、それをことごとく必ず破壊しなければならない。」

異邦の民たちがほかの神々を礼拝していた場所はこわしてしまわなければならないかかったのに、ソロモンはそのまま同じ場所で神に全焼のいけにえをささげていた。これは大きな問題です。なぜソロモンはこんなことをしたのか。2節で、「当時はまだ、主の名のための宮が建てられていなかったから」とあり、それなりの事情はあつたと一応の猶予を与えています。しかしだからと言って、そのまま良いわけではありません。神はこのことを取り扱っていきます。

2 ソロモンの見た夢

1) 「あなたに何を与えようか」

ソロモンがギブオンの高き所で盛大に全焼のいけにえをささげたその日の夜、夢の中に主が現れます。律法に反することをしたのですから、叱るために現れたのかと思えば、意外なことにこう語るのです。5節後半。「あなたに何を与えようか。願え。」なぜこのタイミングでこのような質問をソロモンにす

るのか。不思議です。必ず理由があるはずで、そのことについてはまた最後のところで触れるでしょう。

2) 正しい訴えを聞き分ける判断力を求めた

ソロモンはどう応答したか。9節。「善悪を判断してあなたの民をさばくために聞き分ける心をしもべに与えてください。さもなければ、だれに、このおびただしいあなたの民をさばくことができるでしょうか。」

ソロモンは自分の幸福のために何かを求めようとはしません。自分がイスラエルの王となったのは、自分の力によるものではない。イスラエルの民も自分が自由にできる所有物でもない。神の民である。自分は、その「神の民」を正しく導くために王になったと自覚しています。しかし自分は経験がない。未熟者である。だから、善悪を判断してあなたの民をさばくために聞き分ける心を与えてください。そのように神に願い求めます。

これに対する神の応答は予想以上のものでした。ソロモンの願いに答えてくださっただけでなく、ソロモンが願わなかったもの、富も誉れも、そして長寿も与えると約束しました。

もし、みなさんに神が夢の中に現れてくださり、「あなたに何を与えようか。願え」と言われたら、なにを願うでしょうか。なにしろ夢の中ですから、「神が喜ぶことを言わなければ」とか、考える余裕はありません。心の中の深い所にあるものがそのまま出て来ます。隠しようがありません。「もっと贅沢な暮らしがしたい」とか、「もっと自分が幸せになりたい」とか、「もっと健康で長生きできるように」とか、とにかく自分のことばかりそれこそ夢中になって訴えるかも知れ

ません。

神はどうされるでしょうか。なんでも願えば聞いてくださる気前の良い方なのでしょう。そうではないということがわかります。10節。「この願い事は主の御心になかった。」ポイントは、主の御心になかった願いをするかどうかにかかっています。では、主の御心は何か。そのことを考えなければなりません。

3) 神の国とその義とをまず第一に求めなさい

マタイの福音書7章7節でイエスはこう語っています。「求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。」そして11節。「してみると、あなたがたは、悪い者であっても、自分の子どもには良い物を与える事を知っているのです。とすれば、なおのこと、天におられるあなた方の父が、どうして、求める者たちに良いものを下さらないことがありましよう。」

小さな子どもがナイフが欲しいと願ったらどうしますか。「おお、そうか」と言って与える親はいません。子どものために良いことではないとわかるからです。神も同じです。願えば何でも与えられるのではない。良いことだけを与えようとする。願っても与えられないことがもしあるならば、それは私たちの本当の幸せに結びつかないと知っておられるためなのかもしれません。

こんなことを言うと質問が出て来るはず。で「はいったい何を願ったらいいのか。どうしたら神の御心になかった願いを祈ることができるのか。」

イエスはこうも言われました。マタイ6章33節。「神の国とその義とをまず第一に求

めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。」では「神の国を求めるとは何か。これがわかりにくいのでみな苦労します。では、わからない人は願ってはわかかるまで祈ってはいけないということか。そんなことはありません。私たちがわからなくても、神の方から何をを願えばよいか教えてくださる、と考えてみたらどうでしょう。

ソロモンがそうでした。なぜこのタイミングで神はソロモンにそれも夢の中で、「あなたに何を与えようか。願え」と聞かれたのか不思議だと言いました。ここで注目すべきことは、ソロモンの方から自ら進んで祈り願ったのではないということです。神の方から「何を与えようか」と申し出てくれた。これはどういうことか。私たちが御心になかった願いを言えるようになったとき、そのタイミングをみはからって神は質問して下さる、ということではないですか。御心にかなうような答えができるようにと、祈りを引きだしてくださる。ですから、私たちは恐れずに祈り願えばよいのではないのでしょうか。もしも御心にかなわない願いをしているのなら、神が私たちの祈りを変えてくださいます。私たちが努力して願うのではない。御心にかなう願いができるようにと、神は常に働きかけてくださっているのです。

3 神の導き

1) 夢から覚めたソロモン

さて、夢から覚めたソロモンはどうしたか。15節。「そこで、彼はエルサレムに行き、主の契約の箱の前に立って、全焼のいけにえをささげ、和解のいけにえをささげ、すべての家来たちを招いて祝宴を開いた。」

ソロモンにはいくつかの弱さがあったと最初に述べました。結婚のこともそうでしたが、ここで問題となっていたのはモーセの律法を破って、高き所でいけにえをささげていたことでした。神はこのことを何とかしなければと考えます。それがあの質問です。「高き所」の問題と「何を与えようか」という質問と、一見なにも関係がないように見えます。でも、今ソロモンは何をしているか、見てください。高き所にまた行ったか。行ってない。その代わり、主の契約の箱の前に行きます。そこで全焼のいけにえと和解のいけにえをささげます。自分ひとりだけ祝うのではなく、家来たちを招き、喜びを共にします。

こうして見てくると、なぜ神がソロモンにこのタイミングで語りかけていったのかがわかるでしょう。神の律法を守れないという私たちの弱さを神はご存じです。罪の現実の中で苦しんでいるのを知ってくださいます。そんなとき、神の導き方は実に不思議です。ソロモンがどう答えるか神はあらかじめご存じです。答えられる質問をします。ソロモンがそのとおりに答えると、よく御心にかなったことを答えたと言って喜んでくれる。そして願わなかったことさえも与えようとする。恵みが次々と降り注いでくるようです。

神の取り扱いとはこのようなことです。自分で自分を変えることはできません。ただ、人は神の恵みを知ったとき、初めて内側から変えられていきます。ソロモンは、心の底から喜びがあふれてきて神の前に走り出していきました。そうして気がつかないうちに、高き所を離れ、主の御心にかなう歩みをしていく者とされました。

この神が私たちを今日も導いてくださいます。